

朝から快晴だった。

沢田花林は部屋から部屋へ行ったり来たりして忙しく動いていた。今日は地域の譲渡さわだかりん掲示板サイトに載せていたベッドとローチェストの引き取りがある日だ。

部屋中の窓を開けると風が縦横に吹き抜ける。花林が大家さんの敷地内に建てられたアパートの二階に入居したときには一部屋として貸し出していたが、昭和四十年代に建てられた当時は一階、二階それぞれ三畳間が四つある学生寮だったらしく、その名残として全部の部屋に大きな窓と風呂はないのに共有部分と二つの部屋には流し台があるのだ。

家に籠るようになって一カ月、家財道具の処分を始めたのが二週間前になる。それは十五年務めた会社が倒産したからだだった。当初はなんとなくずっと働ける職場だと思い、他の生き方など考えもしていなかったため、生きる道を断たれた思いで呆然とするばかりだった。花林は倒産とはすなわち即刻、会社の実態がなくなるのだと思っていた。が、そうではなく、男性社員が中心となって会社は再建を目指すのか、退職条件はどうなるのかなどを問うたにあつという間に結束を密にして会社に集まった。まだ方向性は決まっていないが、転職希望者には関連企業の求人情報を共有するなど、花林のもとにも交渉の進捗が絶えずメールで届いた。

窓からショベルカーが動く大きな音が入ってきた。アパートの隣の広い庭がある大きな一軒家からだだった。長い間空き家だったのが、花林が会社に行かなくなった同じ頃に解体工事が始まった。そこは空き家になってからも毎年、生垣の山茶花が冬の殺風景な路地に赤い花をつけてくれた。春になると今度は母屋全体を包むように伸びたモッコウバラが一斉に黄色い花を咲かせ、まるでおとぎ話にでてくる家のようになった。中庭にはベゴニアが青々とした雑草の隙間からピンクの花を覗かせ、それは秋まで咲き続けるのだ。

三年ほどまえ、一階を借りていた幌布で鞆を作っていた職人さんが出て行ってからは空室のままになっており、母屋と入口が別で誰とも顔を合わさずにすむ気楽さで、休日は玄関ドアの前に小さなテーブルと椅子を置いて、隣の庭の花を眺めながら本を読んだりコー

ヒーを飲んだりして過ごしてきた。

短く二度クラクションが鳴った。更地に戻りつつある隣の敷地から階段下に目を移した。若い男女が軽トラックから降りてきて、こちらにお辞儀をした。花林も彼らにお辞儀を返した。首を引つ込め、ドアの鍵を開けているとカンカンと音をたて鉄の階段を上ってきた。家にあがると、すっかり物がなくなった部屋の様子に驚いたのかふたりは顔を見合わせていた。

「大きな物は今日のベッドとチェストで最後だからね」と花林はベッドの置いてある部屋を案内しながら言った。

「引っ越しですか……」花林の言葉に合点がいかない口ぶりで男の方が訊ねた。

「引っ越し、とは違うかな。実家に帰るからね、もういらなくて」

それを聞いてふたりは安心したように大きく息を吐いた。

「こいつ、妹なんですよ。四月からこっちの専門学校に行くんで俺のところと一緒に住むんですけど、布団はいやだベッドがいいっていうんで掲示板で探してたんです。ちなみにお姉さんの実家はどこですか？」

「大阪」そう答えながら専門学校になる女の子の方をみた。正しくは彼女の向こうにいる十八歳の自分を花林はみていた。

花林が東京に出てきたのは夜間部がある美術系専門学校に行くためと自活を始めるためだ。ちょうど三月のこの時期に、学校のある丸の内線沿線に部屋を探すため上京した。飛び込みで入った不動産屋の人が大阪からひとりで部屋探しにきた花林を訝しがった。両親は忙しくて来られないと嘘をつき、仮契約まで済ませたが、書類一式を持ち帰り連帯保証人のところで問題が生じた。失業してから一年近く仕事をしていない父親では審査が通らないというのだ。なんとということだ、せっかく家を出ていける算段がついたというのに。花林はあてにしてはならない両親の最後の重石にもがいた。

運び終わりましたと男に声をかけられた。これ、つまらんものですがと、紙袋を手渡された。何から何までお兄さんに世話を焼いてもらい、妹の方は安心して兄の後ろをついてまわっているだけだ。明るい茶色に染めた髪はカールアイロンできれいに立巻きに整えられている。大きな瞳はカラーコンタクトで強調され、まつ毛はいかにも人工物のように長かった。花林は何の専門学校に行くのか思わず訊ねそうになったが、そこからいくらか会話が続くことを想像して止めた。来た時のように、クラクションを鳴らすと軽トラックは走りだしていった。ドアを閉め部屋に上がると、手渡された紙袋の中をみた。重みのある

袋は干し芋と印刷されていた。さらに引き出してみると茨城名産と書いてある。茨城といえば納豆しか思い浮かばないが名産というのなら生産量が多いのだろう。妹は袋を受け取った花林に向かって、天ぷらにすると美味しいですと、細かい声ではあったが初めて喋った。

部屋の中に入ってくる風が強くなった。空をみると灰色に変わっている。開け放った窓を順番に閉めにまわった。十八歳の花林がここに住み始めたとき、この部屋は広すぎた。なにせ越してきたときの荷物は旅行鞆と服が詰まった段ボール箱が三つだけだし、布団はこっちに来てから買った。最初の夜に布団を敷き横になると、木枠の窓が風でガタガタと音を鳴らし、階下の住人の話し声が襖を隔てたくらいの近さで聞こえてきて全然眠ることができなかった。トイレは慣れない和式で風呂がないので生まれて初めて銭湯を経験した。高校時代はアルバイトをしてこなかったこともあり、チェーン店のカフェで早朝から夕方まで立ち仕事をする夜と夜の学校ではへとへとで何も頭に入ってこなかった。バイトの先輩に嫌味を言われたり、無視されたりしたが家を出られたことに比べれば何てこなかった。

スマホに電話がかかってきた。かけてきたのは倒産した会社で経理をしていた女子社員だった。彼女は倒産整理に携わる弁護士に採用され仕事をしていた。用件は離職票や年金などにまつわる書類が全部揃ったので会社に取りに来るようにというものだった。倒産直後は退職金も払われなと言われていたのが、交渉のかいあって支払われることになった。同僚たちとのやりとりを通して、突然に日常が奪われることは誰にでも起こりうることで、小さな子どもを育てている家庭持ちの方がどれだけ大変であるか、周りをみているうちに冷静に物を考えられるようになっていた。ひとりふたりと誘いを受けて次の会社が決まっていく。電話の彼女も簿記の資格を持っているのでいち早く次の働き先が決まったひとりだ。倒産した会社は紙コップや紙容器を作るメーカーで花林はそこでパッケージデザイナーを担当していた。長く仕事を続けてこられたのはオーダーを受けたパッケージをひとりで黙々と作るのが仕事だったからだ。入社した頃の頃こそ、職場の懇親会や歓送迎会にでなくてならなかったが仕事で一本立ちしてからは、堅物で変わり者というレッテルと引き換えにひとりでも完結させた。小さな会社だったのでデザイン担当は花林だけで後輩の教育係もまぬがれ居心地のいい職場だった。花林の仕事は倒産した会社でこそ必要とされていたが他から求められることはなかった。彼女は電話を切る時、これで会えなくなるのが寂しいと言った。花林もそうだねと相槌をうった。通話はそれで終わった。

ぐうとお腹が鳴った。冷蔵庫を手放してから家で料理はしていない。買い物に行くか悩

んだが、大阪に送り返す箱詰め作業に取りかかるとする。業者の見積もりでは、家具家電を除いても段ボール箱四十個は必要だと言われた。自分ではその半分ほどだと考えていたので驚いたが、詰めた箱はすでに三〇箱を越えた。

残るは本と小物だけとなった。これらは専門学校のときに買った本や小物でどうしても手放せないものだった。美術系の学校では絵画科を選んだこともあり美術館にはよく出かけた。東京では毎日どこかに観に行けるほどたくさん展覧会があった。手に取った図録をめぐって見た。上野の博物館でナウマン象の骨を観たときに買ったものだ。透明ケースに入った大きな骨の写真がでてきた。あの時、頭骨は千葉で下顎は渋谷で発見されたと解説を読んで、自分が住む東京のどこかにナウマン象が歩いている姿を想像して愉快になった。それからすっかり古代ファンになり、油絵の題材も彫像も図録を買っては、そこから選んだものを描いたり造ったりした。

ラックが空になったので動かすと、隙間から仕事で造ったと思われる組み立てる前のパッケージがでてきた。花林は綿埃のついたそれを拾って確かめた。そこには片手をあげたはにわのイラストが描かれ、丸ゴシックのフォントで「はにわアイス」と印刷されていた。土産物屋に卸すスーツの会社からオーダーされたものだった。

パラパラと雨がトタン屋根に当たる音がしだした。雨が降り出すと町が一瞬にして静かになる。たぶんそれまでしていた仕事の手を止め、雨をしのぐためにみんなが家に引きこもるからだろう。玄関横の窓を開けてみた。四、五人で作業していた隣もショベルカーのエンジンは止まり、作業員もいなくなっていた。

花林はこの瞬間が好きだった。高校まで暮らした実家でも花林が二階の部屋にいるとき、雨が降り出すと家の中がシンと静まり返った。気圧の変化に弱い母が横になるからだ。そうでないときの母はいつも何かに怒っていたし、家にはいつも母とふたりだった。父は朝早く仕事に行き、いつも終電で帰ってくる。休みの日は一日中自分の部屋で寝ていた。

段ボール箱は二枚を残して大阪に送る分は収まった。引越し業者は明日集荷にきて、三日後の明々後日に大阪の実家に届くようにしている。空になったラックは分解して紐をかけた。粗大ごみに出すため買っておいた処理券を貼る。これも明日に回収される予定なのでアパートの前に出しておけばいい。

花林はシューズやスエット、タオルの入った大きなトートバッグを持つと部屋の鍵を閉めて階段をおりた。雨はやんで薄日が差している。アパートの門を開けると路地の突き当

りでゴルフクラブを振っているおじさんが見えた。花林がいつも家にいるようになってから見かける人で傍を通ると危ないし、挨拶するのが嫌さに会社に勤めていた時は通らなかつた反対方向に行くようになった。駅からアパートまでは青梅街道を南へ入ればどこからでも辿り着ける。ただし迷路のように行き止まりがたくさんあるので二回角を曲がればいい遠回りの道を選んで歩いた。

駅前にあるビルのエレベーターに乗り込む。ここは花林が三六五日通っているスポーツジムだ。カウンターの中にいるスタッフの女の子に会員証を渡す。

「沢田さん、今月で退会されるって聞いたんですがホントなんですか？」

ロッカーのキーを渡しながら訊いてきた。花林が頷くと「ウソだ、寂しい」と言っただけをくねらせた。花林は笑って、鍵を受け取る。

住んでいるアパートに風呂がないため、専門学校時代は銭湯に行っていた。会社勤めを始め数年もしないうちに何軒かの銭湯が廃業してしまった。その頃このジムが駅前にできたので入会した。スタジオでのレッスンは一切受けず、ランニングマシンで一〇キロ走るのがルーティーンだった。走るのは口実作りで目的は風呂やサウナだった。夜一〇時まで営業していたので会社帰りに立ち寄った。

売店で買った菓子パンをロッカー室で食べ終え、バッグからスエットスーツを取り出しながら、今日は会社の人からもジムのスタッフからも寂しいという言葉聞いたなと思った。改めて、なぜ大阪に戻ろうと思ったのだろうかと考えてみた。会社が倒産したこと、これがなければ思いもなかっただろう。職を失えば何も持っていなかった十八歳の時と同じだ。東京に居場所があると思っていられただけなのは会社のおかげという訳だ。思わず大きな溜息がでた。ロッカーの鍵を閉め、タオルを首にかけてとトレーニングルームへ向かった。

ミネラルウォーターを自販機で買い、ランニングマシンのボトルホルダーに入れた。速度のメモリを上げていき、ゆっくりと足をうしろに蹴りだす。歩幅が安定したら、また大阪に戻ることにした理由を考える。帰らなければならないと思ったことは、ここ数年何度もあったではないか。帰れないことの理由を仕事にしていた。大阪にいてもここ東京にいても花林はひたすら逃げていた。親から人から、そういうことだろうか。でもなぜ逃げなければならなかったのだろうか。問いはまた次の問いになり、一向出口に辿り着けなかった。自ら思考のスイッチを切るように目の前を見た。自分の足音が耳に戻ってくる。

走りながらジムの中を見回した。顔見知り同士が立ち話をしていたり、誰かが誰かのサ

ポートに回ったりしながら笑っている。会社にいるときも、同僚が他愛もない話をしてるところを見ている自分がいた。彼らに存在を気づかれると、決まって花林は笑って離れていく。やがて周りから花林は透明人間のような存在になっていった。

隣のマシンに知った顔の女性が来た。こんにちはと挨拶された。笑って会釈をする。新しくできる人脈というが大袈裟かもしれないが、彼女は花林のことを知ろうというんな質問をしてくる。彼女には花林がまだ見えているからだ。今日、お仕事は？ とまた彼女は訊いてきた。笑って首を横に振る。なぜこの女は声を出さないのだ、と彼女は思うだろう。花林はまだ一〇キロも走っていないがマシンを止め、ペットボトルを抜き取ってベルトから降りた。

ジムの風呂は空いていた。最初の頃こそ銭湯の代わりに使っていただけだが、やがて花林にとつてなくてはならない場所となっていた。それまでは布団に入ってまどろみかけると、すつと覚醒に引き戻されることがある。そのときみぞおちのあたりに不安な気持ち広がっているのだ。それがジムで走り、サウナや風呂に入って帰るようになってからそういうことがなくなった。少しずつ溜まる澱のようなものが不安の種だとしたら、肺や心臓に血液を循環させて、内臓を温めることで消滅させているのだと思った。そのときから人間の心というのは内臓の中にあるのだと信じている。風呂に浸かり湯船の縁を何度も何度もさすっていると近くにいた人に見られた。両手で湯を掬い顔に掛けると勢いよく立ち上がった。

新幹線を降りホームを歩く人の流れについて行く。エスカレーターの手前でいったん流れが止まった。右側に人が並んでいて花林はその列に入った。コンコースになると、また人が並んでいる。何かの店であるのは分かった。改札へ向かう急ぎ足の流れから離れて店が見えるところまで行くと有名な肉まんの売店だった。以前、U S Jに遊びに行った同僚が大阪土産に買ってきて、花林が懐かしがっていると、新大阪駅でみんな買っていると聞いていたことを思い出した。真ん中に数字の入った赤と白の紙袋を持った人たちが新幹線ホームに上がって行く。なるほどと納得すると在来線の改札に向かった。

環状外回り線が天王寺に着いた。ここから「ちん電」と呼んでいた阪堺電車に乗るため歩道橋を上った。歩道橋は片側三車線ある大きな交差点の真上に四方向に足を延ばす形で立っていた。それは花林が高校生のときにもあったが、今はアルファベットの小文字 a をデザインした曲線の歩道橋に変わっていた。

路面を走る阪堺電車のホームに降りる階段までくると、道幅が広がっているのに気づいた。東京に出てから一度だけ大阪に帰ってきた。そのときはあべのハルカスという高層ビルが建ったばかりのときだったが、周辺の道路工事は続いていた。いまはすっかり開発工事が終わったようだ。一車線分セットバックした浴道を見ても以前の様子を思い出すことができなかった。

地上にプラットホームがある阪堺電車は乗車方法や車内の様子は十五年前と変わりがなかった。前方に座り外の景色を凝視するように見回す。電車が発車して一分ほどで次の阿倍野の停留所に着いた。動きだした電車がまたすぐ停まった。前の交差点が赤信号に変わったのだ。花林は交差点の西南角の方に視線をやった。横断歩道の前でプラカードや板挟みを持った人が数人いる。ひとりが拡声器でしゃべり、その人の後ろには立て看板がある。赤いペンキでカジノ反対と書いてあるのが読める。電車が動きだした。交差点を渡りきる寸前、大阪市設南霊園の入口が見えた。

母はこの霊園に眠っている。大阪に帰ってきたのは母の葬式だった。花林が東京に行ったあとに、父が蒸発した。半狂乱になった母から何度も帰って来いと連絡がきたが花林は帰らなかった。やっと何も言ってこなくなったと思っていたら、今度は叔母から母に癌がみつかったと連絡がきた。そのメールには手術するとも見舞いに帰って来いと書かれておらず、花林は自分から帰る決断ができなかった。日常に自ら埋もれようともがいている間に時間が過ぎ、次に叔母からきたメールは母が危篤だという知らせだった。

電車は松虫、北島、姫松と進んで行く。その間に運転士が警笛を鳴らすことが数回あった。自動車が右折するのに線路ぎりぎりに車を停めていたためだ。電車は速度を落とし車に接触しないよう通りすぎる。そのときにワンマンカーの運転手が運転台からドライバーに鋭い一瞥をくれていた。

電車が帝塚山三丁目に停まる。ICカードで運賃を支払い降りた。乗降場所は車道の真ん中にあるため電車が動き出すまで待つて道の端に移動する。この数秒間のもどかしさは昔のままだと思った。少し歩くと万代池が現れた。しかし、以前は車道からこんなに見通せなかった。ぽっかりと開いた場所は何だったのか、すぐに思い出せない。コインパーキングになったその前で左右を確認すると、二階の窓にぬいぐるみが大量に置いてあった小さな喫茶店がないことに気づいた。当時から人の出入りするところをみたことがなく、それでもときどきドアにぶら下げたメニューが取り換えられたりしていた。近所では宗教かぶれの老女がやっているから敬遠されていたことまで思い出した。

子どものころは万代池が遊び場で一日に何度もこの道を横断した。道沿いにドライアイスを作る工場があり、特に夏場は地面を這うような白い煙が流れでて子どもの好奇心を誘った。それをおばけに見立てて店の前を覗きにいったものだった。前回のときと違っていまは心に余裕があるのだろうか、懐かしさは楽しさとなり停留所から三分で着くところを十分もかけていた。

お好み焼き屋の暖簾が風で揺れている。この角を曲がれば実家だった。いままでの陽気さが嘘のようになくなり、みぞおちの辺りから重い空気の塊が鎖骨のところまで膨張して息苦しくなる。一旦呼吸を整えてから、思い切って角を曲がった。

すると家の前にいた人と目が合った。叔母だった。

「叔母さん！」

まさか来てくれるとは思っていなかったので思わず大きな声がでた。

「おかえり。前に荷物が今日届くって言ってたから、家を開けにきてたのよ」

よく見ると叔母はエプロンをして、手に箒を持っていた。

「それより、これ」

叔母は門の屋根に目配せした。花林も同じ方を見る。門の屋根の上には長毛の黒い猫が手足を伸ばして寝ていた。叔母が箒の先で黒猫の足の裏を軽くつついた。黒猫は頭を少しもたげてフリーズした。しばらくのち、思い出したように手先を持ち上げて舌で舐め始める。その最中に自分を見ている花林たちに気が付いてのっそりと起き上がった。

猫といえば、よく万代池の草むらに段ボールに入れられて仔猫が捨てられていた。小学生の頃は何度か持ち帰って飼ってほしいと母親に頼んだが、それはそれは怖い鬼の形相で元のところに返してこいと叱られた。花林は生まれてこのかた生き物を飼って育てたことがない。

「どこかの飼い猫かしらね」

叔母は箒をおろしながら呟いた。

玄関の三和土に立つと、凝縮された実家のおいが花林の顔を撫でた。いい香りとか嫌な臭いではなく、これは「においの記憶」と呼ぶべき「におい」だった。木材と壁材と水回りの湿ったにおいが混ざりあった古い家独特のものだろうか。

叔母が台所で何かをしている気配がする。廊下を通って台所に入ると、ダイニングテーブルの上にスーパールのレジ袋がどんと置かれていて、そこから次々に買ったものを取り出していた。

「家にあった洗剤の類は全部捨てたから、新しく買って来たよ。今日は荷物を運びこんだら、うちにいらっしやいよ。片付けは明日からにしてさ」

花林は黙って俯いた。

「また暗い顔して。もうこの家には花林しかないんだから、もっと明るくなさい」

これがいつもの叔母だ。花林が帰らなかったときも怒らなかった。叔母に優しくされるほど自分が最低の人間に思えるのだった。

ほどなくして引越しのトラックが家の前に停まった。青い作業着の男三人がバケツリレーの要領で段ボールを運び込む。箱の上には予めどこに運び入れるか書くように指示されていたので、彼らは部屋を確認するとあとは黙っていてもそれぞれの場所に持って行ってくれた。花林は作業が終わるまでリビングにある掃き出しのサッシ窓を開けて中庭を見ていた。雑草はなく、ここも家の中同様に叔母が手入れしてくれていたのだろう。

「さあ、行くよ」

いつの間にか作業は終わっていた。叔母は家の雨戸を閉めて回りながら花林に声をかけてきた。花林もリビングの雨戸を閉めて家をでた。

現在、叔母が住んでいる家は祖父の家だったところで花林の実家から歩いて十分ほどの距離にある。叔母の後ろを黙ってついて歩きながら、叔母の姿を見ていた。去年か一昨年に中学校の教師を退職したので歳は六十一歳か六十二歳のはずだがもともと若く見える。余分な贅肉はついておらず、ベージュのレギンスに青いスニーカーを履いた足首はアキレス腱が張りだしランナーのように引き締まっている。花林は子どものときから父にも、この叔母にも似ていると言われていたのだ。父は身長が一八〇センチあり、叔母も一六五センチはあるだろう。花林も一六八センチと平均より高い。家系に外国人の血は入っていないはずだが、父はハーフの俳優に似ていると言われていた。

筋を一本隔てると高い塀に囲まれた大きな家が立ち並ぶ一帯に変わる。祖父の家はその中でも見劣りのしない純日本建築の家だった。叔母が門の横の潜り戸を開けて中に入った。玄関まで飛び石が敷かれ、その両側に赤い花芽をふくらませたツツジが高さ揃えて植えられている。子どものときの記憶では背の高い木がたくさん植えられていたと思ったが記憶違いだろうかと考えていると、

「何年前かに大阪にすごい台風が来たの知ってる？ そのときに庭の高い木はほとんど倒れてしまったんよ。塀も何カ所か崩れたしね。こっちは被害あったんだけど、花林の家は何ともなかったよ」

そういえばニュースで車が転がっているところや関空の連絡橋にタンカーがぶつかった映像をみた気がする。

「さあさあ、とにかく中にお入りなさい」

叔母は大きな引き戸の手前で花林を手招きした。

十五年前、アパートの保証人のサインを叔母に頼みにきたとき、廊下は物でいっぱいだったことを覚えている。それとシツプ薬の臭いやアルコール消毒の臭いに交じったアンモニア臭も。それは祖父が脳梗塞で寝たきりになり、祖母は骨粗鬆症が進み家の中でもあまり動けなくなっていたせいだった。それぞれに介護ヘルパーをつけてはいるが、夜は叔母がひとりで世話をしていた。

室内はすっかりリノベーションされていて一階はキッチンからリビングがマンションの間取りのようにひと続きになり、床も白木のフローリングに変わっていた。階段を挟んで祖母の寝室と応接室だった部屋は跡形もなく、開いた戸口から中を覗くとそこは何かのレッスン場のように広く伽藍洞がらんどうになっていた。

「叔母さん、ここで何かしてるの？」

部屋の隅にはオーディオ機材があり、ボックスの中には衣装のような服が無造作に投げ入れられていた。

「わかる？ わたし舞踏劇をやってるの。一応主宰。地域創成の劇団みたいなもので公演もまだ三回しかしてないんだけどね」

叔母はそう言うときッチンの方へ戻っていった。舞踏劇、と花林は声に出して言うてみた。玄関で履いたスリッパもそうだがこの家の中にはアジアを彷彿とさせる小物がいたるところにあった。もう一度スリッパを見ると、麻で織られた生地できていて見かけはスリッパというよりサンダルに近かった。部屋に足を踏み入れた。スタジオの内側の壁には木の皮で出来たようなお面が何種類もかけてある。カーテンが引かれていてうす暗いので部屋を横切ってカーテンを開けた。まずは床から天井近くまである大きな窓に驚いた。その窓がL字に部屋の二辺に渡っている。窓枠も一般的なものではなく厚みもあった。窓から斜光が流れこんできた。床には木の葉陰が揺れている。窓の鍵をはずし動かした。重みを含みつつもスムーズに開いた。暖まった空気と土のしっとりした匂いのあとから風に乗って沈丁花の香りがした。花林は庭を見回す。ここは台風の被害をまぬがれた大きな木が何本もある。その木の間から赤と白の小花をつけた低い木が見えた。あった、と心の声が言った。

「花林」と呼ぶ叔母の声がキッチンからした。窓もカーテンも元通りにして部屋をでた。ダイニングテーブルには皿に載ったカップが置かれていた。キッチンに漂う匂いで中身はコーヒーだと分かる。先に座っていた叔母が、

「今晚、何食べたい？」と訊いてきた。

花林も椅子に座り、目の前のカップを取る。真ん中に置かれた大きな皿にはヨックモックの長細い菓子が入っている。

「懐かしい」

見た途端、菓子をとり上げた。

「あいかわらずやね」

叔母が笑っている。

「え、あいかわらずって何が？」

首を傾げていると、

「小学校のときだったかなあ、おじいちゃんの家に来た時、たまたまいただきものでこのお菓子があつたのよ。したら花林が普段は言わないのに、美味しい、美味しいってすごく喜ぶわけ。だから花林が来るって分かっていたら、いつも買っておいたんよ」

そんなこととは知らなかった。懐かしいと思つたのは、おじいちゃんの家に行けばいつもこの菓子があるということだった。中学生になって以降は家族揃っておじいちゃんの家に来ていない。そもそも家族でどこかに行くこともなくなっていた。

「じゃあさ、すき焼きもそう？」

花林がこの家でご飯を食べる時はたいていすき焼きだったのだ。

「正解。だから実はもう用意してるのよ」

叔母は冷蔵庫を指さした。

すき焼きを食べるのは何年ぶりだろう。叔母がカセットコンロに載った鉄鍋に牛脂を押し付けている姿を見ながら思った。子どものころ、すき焼きだけはおじいちゃんが作っていたことも思い出した。

叔母が牛肉を一枚取って鉄鍋で焼き出した。油の弾ける音と肉の焼ける匂いが広がる。

まだ赤みの残る肉の上に砂糖を載せ、そのうえに醤油をかけた。

「はいどうぞ」

そういうと叔母は花林の器に醤油のしたたる牛肉を入れた。花林はあらかじめ溶いてい

た生卵を纏わりつけた牛肉を口に入れた。それは目を見開く美味しさだった。ものが言えず頷くばかりの花林をみて、叔母も自分の器に焼いた牛肉をいれた。

食事が進んだ頃、中学生になってからお正月も来なくなっただけど何かあったのかと訊いた。すると、ずつとにこやかな顔をしていた叔母の顔が固まった。いま聞くべきではなかったと後悔するが仕方がない。

「叔母さんごめん。もし言いづらいなら言わなくて大丈夫だから」

わざと笑いもしたが叔母は嫌なのではなく、どう言おうか考えているようだった。

叔母は箸を揃えてテーブルに置くと、ゆっくりと溜めてから声を発した。

「おじいちゃんがどんな人だったか、子どもだった花林には分からなかったでしょうけど、沢田家はおじいちゃんの意向がすべてだったの。花林のお父さんの勤め先もおじいちゃんの仕事関係先の社長に頼んで入社させた。それは将来おじいちゃんの会社を継ぐための修行のようなものだった。わたしは女だから短大の家政科に行けと言われた。お父さんはおじいちゃんの言う通りにしたけど、わたしは嫁に行くだけの将来なんて嫌だと反発したのね。なら金はださんって言われたけど、家を出て行くっていったらおじいちゃんが折れて四年大学に行けた」

ここで叔母はひと息大きく吐き出した。

「兄さんはそれを知って、わたしに言ってきたのよ」

「何て？」

父について、こんな話を聞くのは生まれて初めてだ。

「俺は親父に逆らう根性が無かったって。いまからでも遅くないじゃないって言ったんだけど、時間の問題じゃないって言うの。でもねえ、わたしもその意味が分かるときがきたのよ……。教師の仕事を始めて五年くらい経ったころだったかな、好きな人ができて結婚を考えていたので親に紹介したの。そしたらおじいちゃんが彼の出自を調べさせたの。結果、結婚はさせないと、わたしにじゃなくて彼の家に言いに行った。わたしは彼に謝ったわ」

叔母はそれで生涯独身だったのかと思ったが、結末は違った。

「わたしは反対されても彼と結婚しようと思ってた。でもね、おばあちゃんがね、お前が彼と結婚したら一生会えなくなるって泣くの。出て行くなら死ぬとまで……。苦しんでるわたしを見て、彼がもう諦めようって。一緒になっても君は親を捨てたことをずっと後悔するよって。あ、ごめんわたしの話ばかりして。兄さんはね、花林が中学生になったこ

ろおじいさんの承諾なしに勤めていた会社を辞めて転職したのよ」

それを知ったおじいちゃんが激昂して、そのとき倒れてしまったのだと。花林の家が崩壊し始めた時期とも一致する。そうして記憶の片りんを集めていると、

「花林はどうして大阪に帰ってこようと思った？」

急にこっちに話が回ってきた。

「それは……」

言葉に詰まった。

「東京にだって、花林の築いてきたものがたくさんあったでしょう」

叔母は人間関係のことを言っているのか。だったら、答えはノーだ。

「そんなの、ないよ」

本当はないのだ、だから即答した。

いつか帰らなければならぬと思っていたから。それがさっきの質問の答えなのだが、なぜいつか帰らなければならぬと思っていたのか、それを考え出すとまた堂々巡りだった。

「叔母ちゃんはなんで親のそばを離れなかったの？ わたしは親から逃げたかった。家がお母さんが嫌いだった。あのまま、あの家にいたら自分は何のためにこの世に存在しているのか、生きてる意味がないんじゃないかって思ってたと思う」

ずっと吐き出せなかった言葉だった。吐き出してみると、他人事のように思えた。

「わかってるよ」

叔母の返事に意表を突かれたが、そんなこと叔母にわかるか訳がないと安易な調子合せをされた気がして怒りがふつふつと湧き上がってくるのを感じた。

「わたしが家を出ていかなかったのは、おばあちゃんの策略にまんまと嵌ったからやね。

気が付いたときにはもうおばさんやった。花林が東京に行つてすぐ、兄さんが蒸発したでしょ。花林のお母さんは気が狂つたようになってしまつて……。花林が家にいなくて本当によかったと思つたよ」

叔母が狂つたようになった母を宥め、精神科の医者のところへ連れて行つてくれたのだと。いま初めて知つたことだった。叔母に向いた棘々しい感情が冷えて萎んでいった。

「あのときが最初やったなあ、ちゃんと義姉さんと話をしたの」

叔母はしばらく黙つたまま花林の顔を見ていた。

コンロの上の鉄鍋が空焚き状態で白い煙を出している。叔母はそこに肉を数枚と白菜や

豆腐、糸こんにやくなどを入れて最初のように砂糖と醤油を載せた。火加減を調節し、菜箸で鍋の具材を動かしながら、

「実はね、兄さんの居場所が分かったの」と言った。

「えっ」

花林は椅子から腰を浮かせて前のめりになった。

「突然電話がかかってきたの。もちろん花林のお母さんは亡くなっていたよ。まとまったお金を送って欲しいって……」

そこで言葉が詰まった。それから叔母は前言を取り消すかのように頭を大きく左右に振った。

「花林が大阪に帰ってきたのはいろんな事に区切りがついたってことだと思うの。それにあの時と違ってどこにも逃げる必要がない訳だし。花林は自分の父親とちゃんと話をするべきだと思う」

叔母はやつと言えたという顔をした。

区切りがついたのだろうか。職を失った直後はまだ、自分のこれからの生活はどうなるのかとしか考えていなかった。すぐに仕事を探すつもりでいたはずなのに一日中家にいるようになってからは大阪のことばかり考えるようになった。それは毎日のように送られてくる同僚からのメーリングリストのせいだった。自分のことも大変なのに社員全員のために奔走してくれている。感謝しかないのに彼らとどう接していいのか分からなかったのだ。花林はこれまで人を避けてきたこと、ひとりで生きてきたと自負を持っていたことに大きな誤りがあったのではないかと思ったのだ。それがどうして大阪を思い出させるのか正直分からなかったが出てくるのは母親ばかりだった。特に父がいなくなったと気がふれたように泣き喚き、家に帰ってわたしを助けろと言う母親に向かって「わたしは家にもどるつもりはないから」と言い、それを聞いた母親がプツンと黙って電話を切った時が多かった。

「自分が職を失ったとき、お父さんが失業したときもこんな気持ちだったのかなって考えたけど、お父さんはその前から家族を拒絶していたし、お母さんだけでなく、わたしも嫌っていたと思う」

叔母は俯いていた顔をあげ、

「花林が東京で住むのに親が保証人になれないって知ったときは驚いた。そのことは身内としてすまないと思っていたわ」

花林は頷くも首を横に振った。

叔母はさらに、

「でも今の花林はあのかのときの花林とは違うよね。十年以上もひとりで経済的にも精神的にも自立して生きてきたでしょ」

花林は「それは違う」と言いたかった。けれど全然言葉にできないのだ。返事を待つ叔母の顔を見ていたら「わかった。会ってみる」と言っていた。

叔母はそれを聞くと笑顔になった。空になったグラスを持って立ち上がると冷蔵庫から赤ワインを取り出した。

実家に戻って一週間が過ぎた。荷解きはまったくできていない。花林の部屋は勉強机周りや本棚の中は高校のときのままで止まっている。一度、父の部屋を覗いてみたが当時の新聞が雑に折りたたまれて畳の上に置かれていたりして、着の身着のまま家を出て行ったことが分かった。母親の部屋だけは時間が進んでおり、ベッドをはじめ、花林が見たことのない服や物がたくさんあった。むしろ花林が実家暮らしをしていたときは母が服を買うことなど減多になかったはずだ。

母の葬儀のとき叔母が通帳を見せようとした。名義は父の名前だったがそこにあるお金でひとりになった母親は生活ができたのだそうだ。どうする？ と言った叔母は花林に通帳を渡す気ではなかったが、その時の花林は一刻も早く東京に戻りたくて「また今度にして」と突き戻したのを覚えている。今回も叔母は通帳を持ち出してきた。残高が数万あり、それを見た瞬間の花林の反応を予測していた叔母が、それおじいちゃんが亡くなったときの生命保険金だと説明してくれた。受取人が父親の名前になっていたためこの通帳に振り込まれたのだ。父親に渡したお金もここから出したと言った。今回もまた「もう少し持っていてほしい」と受け取らなかった。

実家に住みだして分かったのだが、門の屋根の上にいた長毛の黒猫は事実上この家の敷地にずっといるようだった。とはいえ、餌はあげていないし、猫の糞尿の臭いもしない。夜は姿を消すようだ。庭に面した掃き出しのサッシ窓を開けると、勝手に上がってリビングに入ってきて寝ている。母親が生きていたら、わめき散らして追い出すはずだ。花林はお腹をみせてだらりと寝ている黒猫を撫でながら思った。

キッチンが使えるようになるまで叔母の家で食事をさせてもらっていたが、ガスコンロ

と電子レンジを買い替えたので、今日から実家で自炊することになった。冷蔵庫にわずかに残っていた調味料などは賞味期限が過ぎたものばかりだったので全部捨てて空っぽにした。

猫を家にいれたまま買い物にかけた。東京にはないパチンコ屋のような名前のスーパーは高校生のときもあるにはあったが、母親はそこでは買い物をしなかった。花林は行動にいちいち母親の顔を浮かべては今を実感するのだった。

買い物の最中に叔母からメールがきた。そこには父の住所と最寄り駅の駅名が書かれていた。最初の食事のときに父の話をしてから、何度も一緒に食事をしたが父の話題をお互いに避けているところがあった。メールの最後には花林が行こうと思ったときで構わないと書き添えてあった。メールを閉じると、再びスーパーの中をゆつくりと歩いた。人参が十本で百円という安さに思わずカゴに入れた。その他にプチトマト、ネギ、春雨、じゃがいも、キュウリ、玉ねぎ、ハム、食パン、鶏もも、豚スライスを買った。米や調味料は叔母の家から分けてもらったものがあるので、これで何食か作れる。レジで会計をすると千五百円でお釣りがきた。

家に帰ると、出かけるまえと同じ場所で黒猫が寝ていた。ダイニングテーブルに置いたレジ袋をがさごそしていると、黒猫が起きて足元にやってきた。長毛の太い尻尾を立てて、何度も体を足にこすりつけている。しゃがみこんで黒猫の背中を撫でてやる。ばたんとその場に倒れこみ、前足で花林の手を掴もうとしてくる。よくみると黒猫のあごの下は白い毛が生えていて、タキシードの白襟のようにみえる。同じように白い毛は四肢の先に少しづつ生えていて、それぞれが白い手袋とソックスのようだ。花林の手がお腹に移った瞬間、上体を起こして花林の手を噛んだ。突然だったので驚いて手を引いたが噛まれたところは全然痛くはなかった。

ガスコンロに鍋をかけお湯を沸かし、皮を剥いたじゃがいもと人参を湯がき、キュウリと玉ねぎはスライスにし、春雨はお湯でもどし、ハムを細く切った。粗熱がとれたじゃがいもと人参をフォークでマッシュし、他の材料を混ぜて塩コショウ、マヨネーズ、隠し味にだし醤油を少しいれてポテトサラダのできあがりだ。この料理は東京でも週一回は作っていた。普通ポテトサラダに春雨は入ってないと知ったのも東京にでてからだった。実家で母親がポテトサラダを作るとこれがでてきた。しかもメインのおかずとしてだった。ポテトサラダがメインのおかずではないことも東京にでてから知った。

炊きたてのご飯と春雨入りポテトサラダで時間は早いが晩御飯を食べ始めた。黒猫がサ

ツシ窓の前で鳴いた。外に出たいのだ。花林は椅子から立ち上がりサッシを開けてやった。黒猫は振り返りもせず庭に降りて去って行った。

テーブルに戻ると食事を再開した。春雨が入っている分、普通のポテトサラダよりも水気が多いので勢いラーメンを啜るときのように音がたつ。玉ねぎの辛味ときゅうりの食感が単調なじやがいものにアクセントを付与する。週一で作るのは外食でもスーパールの総菜でも売ってない完全オリジナル料理だったからだ。食べながら先刻叔母からきたメールを開いた。住所は奈良県高市郡高取町△△で駅は壺阪山とあった。調べてみると近鉄吉野線で飛鳥の隣の駅であった。飛鳥は小学何年かの遠足で行ったきりだが、石舞台の石室がむき出しになった巨石はよく覚えていた。

無職の利点は観光地が混む土日を避けて平日に行けることだと、スマホのカレンダーを確認してみる。いったい今日が何日の何曜日なのかも分からなかったが、今日の日付に赤丸がついていた。ということは、明日は月曜日だった。いくら躊躇していても父親のところに行かなければ、何かが片付かないという思いはあった。思い切って明日訪ねて行こうと決めた。

スマホをテーブルの上に伏せて立ち上がった。食べ終わった食器をシンクに運び、コーヒーを入れるために薬缶をコンロにかけて。テーブルを拭きながら、自分は怒った状態で父親に会うべきなのだろうかと考えた。なぜ何もかも放り投げて、家を出たのか厳しく詰問するべきなのか仮想の父の部屋の中にいる自分と父の在り様まで想像してみた。だが、今更怒りなんて湧かなかった。時間は感情を薄める作用がある。それに十八歳の花林の方が先に家族という形から逃亡した。家出した父親に驚きはしたが責める気持ちも資格もないと思っていた。会うのは叔母に頼まれたからだ。片付けなければならないのも叔母への約束にかかるものだと自分自身に念押しした。

テーブルのスマホを再度手に取り、叔母に明日父を訪ねることにしたとメールを打ち込みかけた。メールを送れば、叔母からすぐに返信がくるだろう。そこに何某かの指示めいたことが書かれている可能性は高い。それでなくとも、なぜ自分が父親に会いに行かなければならないか明確な理由などないのに、連れて帰ってこいなどと言われたら堪らないと打ちかけたメールを消して閉じた。

午後七時を回ったころ、向かいから鐘と太鼓の音がしてきた。花林が物心ついたところからあった宗教の分教会だがどんな人が住んでいるのか一度も見かけたことがなかった。小学生でまだ家族揃って夕食を食べていたころに花林が「どうして人は神様を信じるの？」

と訊いたことがあった。母親は困った顔をして父親の方に目を向けた。父親は茶碗と箸を持ったまま、口にあった食べ物を飲み込むと「不条理ゆえに我信ず、だ」と言った。花林には何のことかさっぱり分からなかったが、母親の方をみると嬉しそうに目尻を下げていたので、それ以上訊くのをやめた。

通勤ラッシュ時を避けた午前十時に天王寺にいた。ここはJRと地下鉄、近鉄があるが近鉄では駅名は阿倍野に変わる。旅行者が天王寺に来て阿倍野の場所が分からず、タクシーに乗って「阿倍野まで」と言ったという笑い話があったが、花林が東京に出てすぐのころ、地図を見ながら有楽町から地下に入って延々歩かされたあげく、地上に出る階段に日比谷と表示が出て驚いたことがあり、そのとき大阪で迷う旅行者の気持ちがかかった。

地下街は地上階よりさらに変わっていて案内表示をみなければ乗り場まで辿り着けなかった。壺阪山へは近鉄南大阪線で橿原神宮前まで行き、そこから吉野線に乗り換える。エンジ色のロングシートに座るのは本当に久しぶりだった。電車が駅を出発するとしばらくは住宅地を走る。それから田畑が増え始め、国道と並走しながら山の間を通り抜ける。花林は先頭車両に乗っていて車内も空いていたため、離れたところからでも運転士が見えた。小学生くらいの男の子が運転手の真後ろのガラスにへばりついている。運転士の制帽からひとつに括った長い髪が出ていて女性だと分かる。運転士になった彼女は子どものころ真後ろにへばりつく小学生のように電車好きだったのだろうか、ふと思った。おそらく違うだろう、根拠はないが人生そんなものだと勝手に決め込んだ。

電車が終点のひとつ前の駅にさしかかる辺りから、車窓風景は住宅地に戻ってきた。橿原神宮前駅に着くと、乗り換えが不安だった吉野線は同じホームから出ることが分かった。今度の車内はリュックを背負った年配の男女のグループが数組乗っていて、行楽気分に分かれたように大きな声で喋り合っていた。リュック組の半分が飛鳥駅で降りていった。残る半分は吉野へ行くのだろうかと考えている間に壺阪山駅に着いた。降りたのは花林を含め数人だった。

改札を出て目に飛び込んできたのは、『高取町観光くすりの町』と書かれたアーケード入口にあるようなゲート看板とすぐ横のタクシースト社のような平屋の建物だった。どちらも昭和のまま時間が止まっていた。ゲートを通り越すと商店街が始まるのかと思いきや、すぐ国道にでる。その信号を渡っても商店街はないが整備された石畳の道路が現れた。その通りは真新しく土佐街道と書かれた立て看板ともども、ここを訪れる観光客のための

ものに違いないと思った。

スマホに出した地図では父親の住所は土佐街道も横断し直進すると指示している。緩い勾配を上り進むと、今度は高取城址と染め抜かれた幟が道に沿って何本も立ち並んでいる。目まぐるしい景色の変化に一旦落ち着こうと思いい立ち止まった。道路から少し奥まった場所に石のベンチをみつけた。よく見るとそこは元公園か今も公園なのか不明ながら、キリンやウサギを模した遊具が青々と伸びた雑草にほぼ埋まっていた。

花林はスマホの地図を拡大してみた。父親の住所のすぐ上のところにキトラ古墳があり、住宅は田畑の一面に点在するほどしか見当たらなかった。想像していた父親の家は古いアパートかハイツのような集合住宅だったが見渡したかぎりではそのような建物は無い。

付近に人は歩いていない。改札をでたときは、小学生くらいの男の子と女の子とその母親らしき三人が花林の前を歩いていった。花林と違いその母子たちは土地勘がありそうでズンズンと歩いていて、いまは視界からいなくなっていた。十分ほど歩くと地図の場所に到着したとスマホが喋った。平屋の家が二軒、道路から下がったところに建っている。一軒は手前にコンクリート造りのテラスがあり、隅に置かれた犬小屋からマルチーズの血が混じったような雑種犬がこちらを見ている。花林が近づこうとすると犬がけたたましく吠えだした。歩道から敷地に降りる階段まで進むと犬は一層激しく吠えた。家の中から人が出てくるのではないかと冷や冷やしながら敷地に足を下ろした。始めに犬のいる家の方に向かった。これだけ犬が吠えても誰も出てこないのは留守なのだろうか。覚悟を決めて、玄関先に立ち表札を探すが見当たらない。少しあかずきって全体を眺めてみると金属製の赤い郵便受けに苗字が貼ってあった。名前を見てここではないと思ったとき、背後で人の気配がした。振り返ると、もう一軒の家に入ろうとする老人がいた。その背中や老人にしては珍しい長身の男をみて、花林は父親に違いないと思った。

「あの……」

二、三步前に歩み出て、男が家の中に入ってしまわないように急いで呼び止めた。男は動きを止め、しばらくしてから振り返った。十五年も経っているのに会っても分からないのではないかと内心では思っていたが一瞥して、その心配が一瞬で消えた。頭髪はまだらに白く、顔に深い皺が何本も刻まれてはいるが父親の顔に違いはなかった。すぐに次の言葉を発さなければいけないと焦りはするが、なんと呼びかければよいか正解が分からない。

結果、もう一度「あの……」と言ったとき、向こうから「花林か？」という言葉がでてきた。

「そう」

と答えながら、父親の顔をじっとみつめる。父親の顔からそんな驚きの感情は汲み取れない。拒絶の感情もみえない。しいて言うなら父親の表情は花林が小学六年の卒業間近の頃、訪ねることの少なくなった祖父の家に行った時の祖父の顔と同じだった。そこは祖母なら笑顔のところだが、祖父から漂うのは〈嫌じゃない〉という雰囲気だけだった。

「入るか？」

父親は空いてる手を腰の辺りで前後に振った。近づいてみるともう片方の手には形の悪い大根が二本抱えられていた。

父親のあとに続き家に入る時、この間まで住んでいた東京のアパートの映像がスクリーンに投影されるように蘇った。玄関のドアといい沓脱のスペースといい、なによりこの建物が経過した年月が似通っているのだ。花林は実家に帰ってきたような錯覚を起こしそうだった。

父親は花林を二間続きの奥の部屋へ行くように促すと、自分は台所のシンクに持っていた大根を下ろした。それから手を洗い、うがいをした。その様子を奥の部屋から眺めていると、だんだん中の様子が向くようになった。台所も部屋もきれいに片付いていて、なんとなくではあるが健全さが伝わってくる。

父親がコップにお茶を入れて持ってきた。果たして、これまで父親にこんなことをしてもらったことがあったらどうかと、目の前にコップが置かれたと同時に後ろにのけぞっていた。それから父親は花林の向かいに胡坐をかいて座った。体を少し斜めにし、手はテーブルに載せて静かに拍子を打っている。その仕草は花林が話を切り出すのを待っているという意味に受け取った。

改めて父親の顔を見てみた。最後に記憶していた父親の表情とは違った。今の顔は花林が幼稚園のころ、まだ家族として機能していたころの懐かしい父親に戻っている。咳払いをしてごまかそうとしたが、訳が分からないまま鼻の奥から熱い液体が昇ってきて、いっかな声が出せない。

思い出したように父親が花林の顔をひよいと見上げた瞬間、父親の口角が少し上がったのを見た。この顔にも思い出があった。幼稚園のお遊戯会するとき、その日は父親が観にきていた。舞台上上がって自己紹介を順番にさせられていて、花林は自分の番にきても名前を言うことができなかった。そしてとうとう泣きべそをかいてしまった。舞台の上から父親を見ると、今のようにシニカルな笑みを浮かべていたのだ。

「いつか来るんじゃないかと思ってたよ」

父親が先に喋った。

「どうして家を出て行ったの？」

花林の言葉にそこから始めるのかという顔を父親がした。

「お前はいま何してる？ 東京で働いてるってきいてたが……」

半ば遮るように再び、

「ねえ、何で？」と繰り返した。

父親は押し黙ったままだった。そこで花林は質問を変えた。

「何か具体的なきっかけがあったとか？ お母さんと決定的な喧嘩をしたとか？」

すると気が抜けたように堅く閉じた口がゆっくり開いた。

「いや、そういうんじゃない。もうずっと前からいろんなことが面倒になってたのかもしれない」

今度は花林が拍子抜けをした。父親は母も花林も嫌っていたから家出をしたと確信していたのにと。

「それって死のうとしてる人みたい。お父さんはちゃんと生きて生活してるじゃない？」

語気が強くなるのを止められず言い放った。

父親が花林の背後を見ているので振り返って同じ所を見た。ヨークシャテリアか長毛のチワワのような犬と父親が収まっている写真立てが整理タンスの上に置かれていた。

「犬飼ってるの？」

思わず部屋を見回した。

「いや、おらん……。ここの前に住んでたときのや。さっきのあれな、帝塚山の家を出るときに決めてたことがあるんや。あのととき、何年かしたら終わりにしようってな、それで家を出たんや。この犬は迷い犬やった。首輪してたけど俺の家の前から離れていかへん。それからちよつと経ったころ、仕事雇い止めになつてな。そんな初めてのことでもないけど、これで、まあ終わりにしようって思ったんや。それで練炭で、部屋閉め切ってやったら、こいつが先にもがきだしよった。それ見て、慌てて窓開けてな」

花林は自分の胸を服の上から握り掴んだ。

「ああ……じゃあ」と言いかけたとき、父親は首を横に振り「いや死んでないよ。ちゅうか長生きしよった」と言った。

犬はジュリーと言う名前だったそうだ。

花林はみぞおちのあたりに重い空気を吸い込んだような気がした。寝入りばなによく襲われた不安感と似ている。それは自分のというより、父親から発せられているものを吸い込んでいたようだった。夫や父親である自分を見限る代償がこの世からいなくなることであった。いまの父親のなかには花林が中学生だったころから沈殿していった澱が泥の海のように溜まっているのだろうか。父の命を繋ぎとめたあの犬はどういう存在だったのだろうか。

花林は大きく息を吐いて重い空気を体から抜き出した。赤の他人どころか異種である犬が父の命を救った。理由などいらぬ。母だつてそうだ。血の繋がった娘に見捨てられたのを元は他人の義妹に看取られた。花林は何をしてももらいたくて、何をしてもらえなくて家族を捨て逃げていたのだろうか。

目の前に置かれたコップを取り上げ飲み干した。今度は父親に見られないように立ち上がりながら、両眼を急いで擦る。

わずか十五分足らずの滞在だった。結局何をしに来たのか自分でも分からずじまいだ。父親の家を出て歩いていると駅の方から来た女の人とすれ違った。肩から下げているエコバックにたっぷり食材が入ってそうだった。しばらく歩いて振り返ってみると、もう姿はなかった。帰りがけにトイレを借りたとき洗面台まわりに父親以外の人が使っているような物が散見された。最後に「今は楽しいの？」と父親に訊いた。「いや、やつぱり生きていくのが面倒くさい」と答えた。

土佐街道の石畳通りに来た。この先の国道を渡ればすぐ壺阪山駅に着くのだが、まだ陽も高かったので石畳を歩くことにした。幅四メートルほどの石畳の通りは両側に水路が流れている。飛鳥駅に向かって歩いていると向かいから車が走ってくる。ここは現役のお店と一般住宅が混ざり合った場所で最近ありがちな昔の街道を復元させ観光名所になっているところとは異にしている。十五分ほど石畳を歩くと再び国道と合流する地点にきた。青い道路案内表示板に檀原神宮と書いてあり、手前に飛鳥駅とあった。来るときは父親と会うことで気持ちに余裕がなかったが、今はひと仕事終えた気分ですら飛鳥を散策してもいいなと思った。国道をさらに十五分歩くと飛鳥駅に着いた。国道を挟んで道の駅があり入口に鉢植えの花がたくさん並べられている。飛鳥には小学校の遠足で来ているはずだが記憶は断片すら残っておらず、その後テレビや雑誌などで繰り返し見聞きした「石舞台」だけが記憶として一枚の写真のように納められているだけだ。飛鳥駅前のロータリーの傍にレンタサイクル屋が二軒あった。近い方には学生たちが十人ばかりたむろしていて、花林は少し

離れた方で借りることにした。店先には観光パンフレットを差し込んだスタンドがあり、それに目を留めながらも受付にいた若い係員に声をかける。まず彼から訊かれたのは電動アシスト付きか、なしかだった。花林は迷うことなく電動アシストを頼む。次に返却時間が午後五時だと告げられた。建物入口に掛けられている丸い壁掛け時計は四時前を差していた。石舞台までの時間を訊く。往復で三十分くらいだと告げられた。

貸し出されたのは茶色の車体の真新しい電動アシスト自転車だった。簡単な操作方法をきき、鍵と返却のときに渡すファイルを受け取ってから自転車に跨った。自転車に乗るのはずいぶん久しぶりだったがサドルに腰を下ろし左足を地面に右足でペダルを踏み込むと、すっと自転車は前に進んだ。右手のグリップがギアになっていて、勾配のないところでは数字を上げて走るようにした。また勾配に差しかかるとアシストが働き、以前なら立ち漕ぎでもしなければ越せなかった坂も楽に走ることができた。花林が道路沿いにある社や天皇陵の案内板をその都度停まって読んでいると、向こうから何組もの自転車群がやってくる。花林は時間のことを思い出し、そこからは目的の石舞台までよそ見をせずに自転車を漕いだ。

石舞台と案内板がでているところに着くとこれまでと風景ががらりと変わった。大きな芝生公園があり、土産物売り場があり、駐車場があった。そこを注意しながら自転車を漕いでいると駐車場の隣に駐輪場があるのを見つけた。警備員が立っていたが無料のようだったのでそこに停めた。道路を渡り、石舞台へと駆け足で向かう。生垣で囲まれ、まわりより一段と暗くなつたところに入口があり入場料を払う受付があった。中に入り受付の隣にある小屋の前を通ると平台の上に「飛鳥の考古学図録」と書かれた冊子が何冊も置かれていた。手に取ってパラパラとめくってみる。東京に行ってからすっかり魅了された縄文時代や土偶を観に千葉の博物館に通っていたころを思い出した。

石舞台と名付けられるだけあって、周りは斜面になっていて、一度階段を下りてまた昇るといふ導線が作られている。早くから石室を覆っていた盛土が失われ、巨大な天井石が露出していたことが名前の由来らしい。いくつもの大きな石が寄せ置かれて矩形を形づくっている。ゆっくりと石の表面や石と石の隙間を凝視しながら歩いて回った。すると石の中から人の話し声が聞こえる。中に入れるのかと周囲を歩く速度があがった。石室の入口に来ると十人ほどの人がいた。皆、ある程度の年のいった人たちで男女も半々の構成だった。同じグループかと思いきや、男女が組になって石室から出てきて出口に向かっていく。どうやら職員の解説を聞いていたみたいだ。石室から人がいなくなるのを待つて中

に入った。縄文遺跡を展示する博物館でもそうだったが、人のいなくなる閉館間際に行くのが常だった。人気がなくなると「もの」の息遣いが大きくなり肌身に触れてくるように思うからだ。今も地面から脈動が感じられる。石の表面に手を置いてみた。何層にも重ねられた時間が手の平の皮膚を突き抜けて体内を駆け巡っている想像をした。

花林にとって変わらないものとは「もの」だった。蒐集していた置物や人形はいつてみれば友だちの代替で、予測もつかない言動をする人間を頼ることも親しみをもつこともできなかった。

石壁に手を滑らせながら石室の中をゆっくりと回り歩いてみる。ふと父親の家を出てすぐにすれ違った女の人の顔が浮かんだ。彼女はすれ違いざま花林の顔を見て、大きく口を開けかけたのだ。その意味が何かその時は分からなかったが、子どもときは父親と瓜二つだと言われていた。いまも花林の顔に父親と似たところはあったのだろう。やはり彼女は父親と関係のある人なのだ。洗面所にあった女性が使う日用品が目には浮かんだ。

血縁が重要だという思いは間違っていると再び、今回父を訪ねたことと、叔母から母の話聞くにつけ、時間が止まっていたのは花林だけであつたと思ひ知つた。花林だけがまだ壊れた家族を引きずって生きていたのだと思つた。

石室の一番奥から石室入口に向いて立ち止まる。入口に逆光で暗い人影が立っていた。さつき石室の中で解説をしていた職員だろうかと思つた。人影は花林を見てか見ないでか、何も言わず去つて行つた。それと同時に太鼓の音が石室の中まで聴こえてきた。高音で。パタパタと掌を素早く動かすような音に続き、粘着質なペチャペチャと引つ張る音がする。ひとつの音が次にくる音に融け合さり共鳴しつづける。そして共鳴した音が空気を動かすかのように花林の腕や髪を撫でていった。これは閉館の合図かと思ひ、石室の外に出ると太鼓の音は石舞台古墳の敷地内ではなく雑木林の方から流れてきているようだった。今しがた石室の入口にいた人影の人物がどこにも見当たらない。シルエツトから男性と分かる人物が視界から消えて、その間を置かず花林も表に出てきたのだ。もしかしたらここから出て行つたのではと、雑木林の方に近寄っていく。そこには柵があつて先に行けないことが分かつた。

雑木林の隙間を縫うように太鼓の音が花林の耳に届く。さつき石室で聴いた音と違って、こつちは波動が直接体に当たる感覚だ。それが花林の鼓動とシンクロするのだった。

ざっと周囲を見渡してみると雑木林へ行けるのは、隣接している公園の遊歩道からのようだった。なにがなんでも花林は音源を確かめたくなり、早足で受付まで戻り場外に出た。

公園に入ると中央の芝生を挟んでベンチが並んでおり、まだ結構な人がいた。子どもたちは波状に隆起した芝生の上を走って何かを追いかけている。またその父親らしき男性が子どもその後ろをついて回っていた。ベンチには年配の男女が腰をかけて水筒の水を飲んだりしている。花林は耳に届く太鼓の音を気にしながら歩いているが、ここにいる人たちは興味がないのか気にしている様子はない。

公園の端まで来るとそこから先は生活道路のような細い道にでた。そのすぐ先はさっきの雑木林の一带で川が流れている。晴れているというのに地面はびっしょりと濡れている。一台の軽トラックをやりすごしてから、道路を渡って川の傍にきた。あたりを濡らしている水は雑木林のある小山から滲みだしているようだ。川に架かった橋を渡ると薄暗い小径になった。川の湾曲に沿って小径が出来ているが人の歩いた形跡はなさそうだ。しばらく行くと川の中に石室に使われているような大きな石が横たわっていた。上流からうちつけるような水が石の左右に分かれ白い水しぶきが立っている。

長く川面を眺めていた。石と石の間で前に進めず回転しつづける水を。さっき渡った橋のあたりでは水道の蛇口から流れ出る程度の勢いしかなかった流れが横溝から流れ込んでくる水流とぶつかり、滝つぼのような水音をあげているさまに。

気がつくとき、太鼓の音が聞こえなくなっていた。花林はデパートで母親を見失ったときのような不安を覚えた。大抵はおもちゃ売り場だった。当時流行りの人形が並ぶ通路に来ると、その数の多さに種類の豊富さに興奮する。母親はそんな花林を呼びにくることなく置いて行ってしまう。フロア中を探し回っても見つからない。泣きべそをかいていると誰かが声をかけてくれ、案内所に連れて行ってくれた。迎えにきた母親は怒っていた。花林は痛いほど強い力で腕を掴まれて引っ張っていかれる。自分が悪いのだから仕方がないと痛みに耐えていた。ただ、さっきまで優しく話しかけてくれていた店員さんが強張った顔で見てくるのが恥ずかしかった。

どちらに行けばいいのか分からなくなり行きつ戻りつしているとき、上流の方から太鼓の音が鳴りだした。その音は道に迷った花林を迎えにきてくれたみたいだった。上流に向かってしばらく歩くと小径が急に狭くなった。雑木林から竹林へと変わる地点に門柱が立っている。山肌に沿うように古民家が建っていて、ここから先は私有地なのかと立ち止まる。細まった道の先を身を乗り出すようにして窺うと車が通れるほどの道に繋がっているようだったので門柱の中へ入ることにした。

太鼓はこの古民家から聞こえている。玄関の前に来ると引き戸の横に嵌めこみのガラス

ケースがついている。花林の立っているところからははっきりは見えないが郷土玩具のようなものがいっぱい詰まっているようだった。小物好きには確かめずにはいられないとばかりに近寄って行った。そこには埴輪のレプリカ、カエルの置物、土偶のレプリカ、縄文土器の欠片、木目込み人形などそう価値があるとは思えないものばかりだったが、花林の好奇心は十分に満たしてくれる物だらけだった。売り物なら分けて欲しいと思ったのは、赤い色がところどころ剥げ落ちた猫の置物だ。手の平にのる饅頭ほどの大きさで胴体に不思議な暗号文字のような彫物がされていた。

太鼓の音はなり続けていた。と、突然引き戸が開き、若い男がひよっこりと頭だけ突き出してきた。

「こんにちは」

そう言いながら今度は体を外に出した。背が高いと思った。白いTシャツに黒いジーンズ姿で素足に鼻緒のついた草履を履いている。花林は足元に降りた視線を次第に上にあげていく。髪は肩くらいまでであり全体に緩いウェーブがかかっている。艶のある黒髪だ。前髪が鼻の真ん中あたりまでおりているが、色白の顔がその奥から浮き上がるように冴えわたっている。睫毛、二重の大きな目、鼻筋の通ったきれいな顔立ちだ。そこまで観察するのにどれくらい時間を要しただろう。男性はその間も黙って立っていてくれた。

何か言わなければならないことは承知しているが、花林の口の中は砂漠の砂のように乾いている。これまでのように笑って会釈して去るしかないと思った。

「太鼓、じゃないんですか？」

若い男は首を少し傾けた。

そうだった。花林はすっかり目的を忘れていたと思った。けれどこの古民家から聞こえていたことが分かればそれでいいはずではとも思った。

「どうぞお入りください」

若い男は花林が通れる幅に引き戸をさらに開く。花林の乾いた口は断る言葉も出さず、玄関先から風に乗って流れてくる白檀の香りを鼻から吸った。若い男は花林の後ろにまわり、動かない花林を軽く押した。動かされながら敷居を跨ぐ瞬間に、表札と思っていた木札に墨の字で〈ゲストハウス星谷〉と書かれているのを見た。

三和土に立つと白檀の香りを放っているのが丸谷焼の器に置かれた香木から出ていることが分かった。花林は小物と同じくらい「いい香り」に目がなく、沈香の香りが一番好きだった。靴を脱ぎ、きれいに磨き上げられた床を踏むと白檀の煙に顔を近づけた。

「ひと部屋空いてますからお泊りになってはどうですか？」

若い男は花林の目を見て、花林よりも先に頷いた。これで契約成立とばかりに奥の間に案内を始める。

「今夜は新月ですからね。こういう時にここに泊まりに来られる方はやっぱり何かで繋がっているんです」

泊まらせようとしているのはそっちじゃないかと花林は思ったが何も言わない。それに縁というのは確かにある。今日家を出る時には、自分が飛鳥の石舞台に行くなどとは思ってもみなかったし、もしあそこで太鼓の音を聞かなければここにも来ていないはずだ。

「さあどうぞ」

若い男は障子を開けて花林を招いてくる。そこは畳敷きの大広間で床の間があり、その横には神棚のような祭壇があった。太鼓は床の間の前に置かれ、若い女が巫女みたいに赤い袴に白い着物で座っている。広間の中央に若い男女数名が円陣を組み、床の間の太鼓よりずっと小さい太鼓を胡坐かいた内腿の中に置いている。花林は一瞬、間違ったところへ来てしまったのではないかと思った。もし宗教の勧誘が始まったらなんとしても逃げださねばと、乾いた口内にわずかに溜まった唾を飲み込む。

「ほら、いつも舜が連れてくる『まれびと』は最初こんな顔してるよね」

やはりリーダー格なのか巫女姿の若い女が口を開いた。彼女が言った『まれびと』とは花林を指しているのか。「こんな顔」とは、いまの疑心暗鬼な花林の様子のことなのか。聞きたいことはいくらでもあるが喋れないものはどうしようもない。

巫女姿の女が花林の前に歩み出て、すつと膝を折ると正座の姿勢になった。花林は見下ろすかたちになり居心地の悪さを覚える。さつき舜と呼ばれていた若い男に助けを求める視線を送ると、両手の手の平を下にして二、三度上下に動かし、それは花林も座れということだと思い、こちらは腰からさげるようにして畳に正座した。

「さて、おいでいただき誠にありがとうございます。『まれびと』様におかれましては、新月の今宵、わがタカマガハラ座が催します祭祀に是非ご参加いただきますよう、ここにこの招待申し上げます」そう言って頭を下げ、頭をあげると同時に両手を上に突き上げた。

それは歌舞伎役者の口上のような芝居がかったものだった。それでもなお、花林が無言を通して、横から舜が「じゃあ、行きましょうか」と声をかけてきた。大広間をでて廊下を玄関の方に向かって歩いているとき、

「ぼくたちはパフォーマンス集団として全国で公演活動しているんですよ。タカマガハラ

つてきいたことあるでしょ？ 神々が生まれる場所、漢字で書くと高いに天地の天に野原の原。それに劇団なになに座の座で高天原座って名乗っているんです。ここは活動拠点で遠征公演以外はここに住んでます。メンバーはさっきの女性とぼくとあとふたりの四人なんです。さっきご覧になったとおり、あそこにいた十人あまりの人は、みなここに泊まった人や公演先で関わった人なんです」

もはや舜は花林との会話を不要とばかりに、独り言のように喋り続けている。

「一旦、こっちに入ってもらえますか？」

大きな座敷机がふたつ並んだ部屋に通される。部屋に入ると奥は板の間になっていて囲炉裏があった。太くて黒い柱と茶色の土壁がここが建てられた当時のものと思われる。木枠のガラス戸越しに中庭が見通せるようになっていた。

舜がタブレットを持ってきた。これでチェックインをするのだと言う。机にタブレットを置くと花林に住所などを入力するよう促した。このときになって花林はタブレットに出ている時刻をみた。一時間でレンタサイクルを返却しないといけないことも同時に思い出した。

「あー」

思わず口をついて出てしまった。すると、舜がそれに反応した。

「どうしました？もしかしてレンタサイクルの返却ですか？それだったら、明日追加料金を払えば問題ないですよ。それに六時前だから店も閉まって誰もいませんから」

花林はしばらく舜の顔を見ていた。どうもいまここにいることが夢心地でしかたがなかった。人と口をきかないことを咎められなかったことがいままでにあっただろうか。こんなに話さなくても居心地のいいことがあっただろうか。

案内された部屋は回廊のようになった中庭の向こうだった。六畳ほどの広さで隣とは襖で仕切られている。腰高のガラス窓の外は山の斜面だ。案内してくれた舜はすぐ夕食の時間になるのでさっきの部屋に帰るように言い出していた。

布団はすでに敷かれていた。花林は鞆を置くと布団の上に横になった。天井の木目に目をやる。吊り下げられている照明も骨董品のようなレトロなものだ。大きく息を吸うと外気が窓の隙間を通って花林の鼻に入ってくる。土の蒸れた匂いに草の青くさが混ざった遠い昔の匂いだった。お腹がぐるぐると音を鳴らした。すぐに来いと言われていたことを思い出し、跳ね起きて部屋を出た。

中庭をちらちらと見ながら廊下を歩く。角を曲がったあたりから、人いきれというのか、

周囲とは温度の違う空気が流れてきた。それに声とも雑音ともつかぬざわめきが聞こえる。ついさつきは誰もいなかったサロン兼板の間には二十人以上の人がおり、大広間にいた人が部屋を移ってきたとしても数が合わない。花林は敷居の手前で舜を目で探した。板の間の奥の部屋から料理を載せたお盆を持って舜が現れた。人の間を掻き分けながらお盆を運ぶ舜を目で追いかける。

突然に背中を軽く叩かれた。花林は飛び上がらんばかりに振り向き後ずさると、そこに巫女姿のさっきの女が立っていた。

「あなたお名前は？」

女はいきなり質問をした。やられたと花林は思う。なぜなら、花林は気持ちを訊かれたときは、笑い顔を作って無言でやり過ぐす。イエスカノーで返事する場合は指をさすか、相手の質問に首を縦横に振ることで終始した。会話が成立しなければ、いくらお喋りな人でも興味をなくしてくれるからだ。でも名前は文字通り名乗るしかない。

「あ、さ、沢田です」声が掠れてほとんどでていなかった。

「え？ なんて」

聞き返された。

「沢田です」

咳払いを二度ほどしてから大きな声で答えた。巫女姿の女は目元に笑みを浮かべた。

「みなさん、こちらが本日の『まれびと』の沢田さんです」

あつけにとられる間もなく、背中に掌をあてられてサロンに入れられた。

「すずさん、沢田さんが驚かれていますよ」

舜が前にでてきた。

「ここにいるのは、沢田さんと同じようにふらりとゲストハウスの前に来られて泊まった方ばかりなんです。『まれびと』とはお客さまのことをここでは呼んでいます。僕たちは古代の祭祀や風習をパフォーマンスに置き換えることをしていて、その時にこうして泊まってくれた『まれびと』の方々がりピートしてくださいなんです。沢田さんは今日が初めてになる『まれびと』ということで、うちの主宰の今村寿々子、みんなすずさんって呼んでいます。みんなに紹介した次第です」

舜はそれから花林を空いている席に案内し、夕食の料理をお盆に載せて持ってきてくれた。片膝を立てた状態で座り、お盆からひとつずつ器を置いていく。置きながらそれがなにかを口にだして、

「もち麦入りの白ご飯、モロヘイヤとうす揚げのお浸し、オクラと南瓜の黒酢あんかけ、カラスカレイの煮つけ、じゅんさいのお味噌汁、最後は奈良漬けです」

すべてを置き終わると、舜は少し顎を逸らして花林を見た。

「これ全部僕がつくりました、奈良漬けは違うけど」と言って、立てていた片膝を下ろし花林の隣に正座した。そこに居られては食べづらいではないかと、箸も取らずに躊躇っている、

「食べづらいですよ。じゃあ僕もここで食べますので料理持ってきます」

よもや花林が返事をするのではないとばかりに、立ち上がり奥に走っていった。舜が運んできたお盆には井ひとつが載っているだけだった。

「さあ、食べましょう。なに？ これ？ これはジュンサイのお茶漬けです。僕ら先月秋田から山形、新潟を旅巡業してきてね、その土地土地の食材を買ったり貰ったりするんですよ。これは秋田で八郎潟町に行ったときに、近所の食品加工会社の社長さんが三ヶースもくださったんで、今日のお味噌汁や僕らの賄いに使ってるんですよ。僕はお茶漬けにドハマリしちゃって、ほぼ毎日食べてます」

見ると、井一面に透明の衣を纏った薄茶色のじゅんさいが載っていた。真ん中にワサビが置かれ、ジュンサイの下にご飯とお茶が注がれていた。舜はレンゲを手にワサビとジュンサイとご飯を混ぜ合わせてから、大きく掬って口に入れた。

「ジュンサイって、海藻ですか？」

花林は質問した。舜は膨らんだ口中を早く減らそうと口元に手を当てて咀嚼している。

「水草だそうです」

飲み込むと同時に返事をした。花林はその慌てようが可笑しくて、笑う代わりに箸を取ってジュンサイの入った味噌汁の椀を口に近づけた。つるりとした食感はいつか食べた時の記憶を蘇らせてくれた。次にモロヘイヤに箸をのばす。丁寧の下処理され、茎の堅さも丁度よい。播り胡麻の香ばしい香りに微かに柑橘系の匂いがする。味付けは薄くて素材の味が舌の上で広がるのがいい。ここでもち麦入りご飯を口に入れる。玄米とも違うもっちりとした噛み応えあるご飯である。カラスカレイは大きな切り身で骨と身は簡単に離れた。花林は人の作った料理を食べる時、味はその人の人柄が出ていると信じている。エッジの立った料理よりも角のない優しい味が好きなのだが、この料理はどれも丸みのある好みの味だった。空腹だったこともあるが、飲み込んだ食べ物が花林の食道や胃の中でもまだ美味しいと声をあげてくるようだった。もち麦入りご飯がなくなったが、おかずは三分の一

以上残っている。すると横からすつと手が出てきた。夢中で食べていたので隣にいる舜のことを忘れていた。黙って茶碗を取り上げると奥に行き、ご飯をよそって戻ってきてくれた。

「ありがとうございます。全部美味しくて」

花林は茶碗を受け取ると礼を言った。

「こんなに美味しそうに食べてもらって、こっちこそありがとうございます、ですよ」

舜の丼は空になっていた。何か話さなければと思うも、再び箸を動かすと集中せずにはいられなかった。

「ご馳走さまでした」

意識せずとも本当の笑顔がでた。サロンの中はほとんどの人が食事を終えていて、数人ずつの塊になって雑談をしていた。すずさんは囲炉裏端のグループの中にいる。同じ釜の飯とはこう言う時に使うものではないのだろうが、花林はこの一員になれた気がする。白檀の香木の香りといい、舜の作った料理といい、このサロンに漂う人から発せられる目にはみえない波長が花林を居心地よくしてくれる。

「すずさんは太鼓を叩かれるんですか？」

そもそもこの場所に誘われることになった太鼓の音はなんだったのだろう。

「夕方にここから聴こえていた太鼓はすずさんが叩いてた締め太鼓だね。能舞台にも使われる華やかな音だ。でも今日の祭祀にはそれとは違う太鼓を使う。それにすずさんは『歌うたい』なんだ。彼女はね、高校生の途中からひとり海外に飛び出して行ったという豪傑な人でね。南米の音楽、特にその土地に根付いた歌に出会いに行くのが目的で、作者不詳の民謡があると、そこに長く住むおばさんから歌を口伝えに教わるんだ。それでふと日本でもそんな歌をみつけたらと思立って、数年前に戻ってきて、いまもそれを継続中なんだ。ほら、あの囲炉裏端にいるのが座員で、バンダナをした白髪の男の人はね、ビリンバウを使って風土の語りをする『風の旅人』っていう人、隣りに座ってる女性は舞踏家で全国の神楽を調べている。僕は民族学が専門のただの研究者なんだけど、それぞれがひとりで動いているところで次々に出会っているんだ」

花林は舜たちの出会いからの話を聴いて、以前、千葉の博物館のショップで買った「森の民」という古代の民話を思い出していた。そこには人は出会うようにして出会う、すべてが必然なのだという話だった。舜がゲストハウスに前で立っている花林を中に呼び寄せたことも、また必然だったのだと素直に受け入れることができた。

主宰のすずさんが立ち上がって二度手を打った。サロン中がしんとなる。

「みなさん、干潮の時刻は九時半です。これから祭祀の設えに向かいますのでご準備ください」

場内から口々に雄叫びのような歓声が沸いた。花林は慌てて舜を見る。

「安心して。僕は沢田さんの世話役として傍にいますから」

ほどなくして、それぞれが荷物を抱えて外に出て行く。中には樽のような物を抱えている人もいる。花林も促されて外にでた。屋内の灯りが届かないところまでくると、あたりは漆黒の闇だった。試しに目を閉じてみる。次に目を開けてみる。どちらにしても網膜に光が届かず、闇の濃淡さえなかった。花林が夕方ここに来た時、先に進もうか躊躇していた道を進んで行く。左手から川の流れる音が聞こえる。雑木林が風で騒めき、土を踏みしめる音が続く。前を歩く人が方向を変える。そこは橋だった。橋の上から川面を眺めるが黒く広がる視界以外何も見えない。ただ、空気の匂いが違っているのだった。

一列で進んでいた行列が芝生を踏んでいる感覚の場所にきて広がり始める。先頭の人が持っていた魚を捕まえる葦か葎でできた円錐状の道具を真ん中に円陣が組まれた。円錐の仕掛け道具の中に白い蠟燭が差し込まれ火が点けられると、闇に慣らされた花林の目にはまぶしいほどの光となってあたりを浮き上がらせる。

全員が円陣の中に組み込まれると、すずさんが台形の小山を背に立ち上がった。

「ここは飛鳥稲淵宮殿跡といって、飛鳥に数ある遺跡の中で究極に何も無いところなのにこのように整然と保存されている場所です。今宵は大潮のときに催された祭りの復元を今回初の試みとして新たな太鼓を使って神楽舞をしたいと思います」

すずさんはさっと掌を上にし、斜め前に置かれた太鼓に注目が集まるように指した。

「これは複製した縄文土器に鹿皮を張ったもので、もとは太鼓としてではなく食糧を貯蔵するための蓋だった説もあります。これを締め太鼓のように紐で縛って太鼓としていろいろな人が演奏しています。わたしたちは赤膚焼の窯元から縄文土器の複製を作ってもらって奈良の鹿の皮で太鼓を作りました。それではいつものように楽な姿勢になって軽く目を閉じてください」

その言葉を最後にすずさんも静かに座った。二、三分が経った頃だろうか、樹々の間から風ともいえぬ、撫でるような空気の揺らぎが押し寄せてきた。それは柔らかな布のお包みを巻かれていた乳児の記憶を呼び覚まされた感覚であり、自分の体積がゼロになったような夢うつつの状態であった。

——ポン

しばらく間があつてまた、

——ポン

石室の中にいる時に聴こえた太鼓の音がした。解放された空の下なのに、太鼓の音は幾層にも重なり音の波紋を広げている。

続いて弦を弾く音、しかも音が振れ曲がつたようなバネの擬音めいた音が鳴りだす。これは「風の旅人」と呼ばれていた男の弾くビリンバウという楽器だろうと想像する。もう目を開けてもいいのかどうか分からず花林は目を閉じたままだった。男は詩を朗読するような口調で語り始めた。風、木、土、水、石、動物へと順番に呼びかけているようだ。その上から重なるような歌声が聴こえ始めた。これはさすがさんの声に違いないと思った。それと歌というより語りである主旋律を讃える母音だけで歌う宇宙戦艦ヤマトのコーラスのようだった。

続いて辺りから立ち上がる気配がする。花林はそれでも目を閉じたままだった。地面を足で叩く音がする。衣の擦れ合う音がする。花林はこんな経験をどこかですることがあるような気がした。絶対そんなことはないのだ。花林は自分に言い聞かすように心の中で否定する。花林の皮膚の表面から熱が立ち上がる気がした。分かった。それなら任せようと思つた。思考する自分を諫めた。

激しく打つ太鼓、テンポを上げるビリンバウ、すすさんの伸びやかなコーラスの声、土を踏みしめる無数の足音が花林の何かと同調したと思つた。知らぬ間に合掌した手の平はしっかりと合わさつて一枚の板と化している。それをどこから糸で引つ張り上げられる感触がし、腕を天に突き上げる。片膝を立てて、足の裏に地面の振動を受ける。反動をつけて立ち上がると、天から降り注がれる音を体いっぱいを受け止めた。地面に足を叩きつけ、片足で飛び跳ね、両手を大きく横に開く。花林は自分の体が喜びに溢れている様をあっけに取られて、なすがままに任せた。

ずっと閉じていたと思つていた目は今、真っ暗な天空に一匹の大きな赤い蟹がいるのを見ている。蟹？　と思つていると、辺りは昼間の明るさとなり、目の前の小山は緑の濃淡に彩られた斜面となつて、道には亀が上を目指してゆっくり歩いている。今度は河原の土手を歩いている花林が見える。辺りは何もかも夕陽に赤く染まり、無数の赤とんぼが飛び交っている。花林は人差し指を突き上げた。そこに赤とんぼがちよこんと留まった。その瞬間、視界は複眼の映像に切り替わり、上の上に体が上昇していく。俯瞰してみると、す

とんと自分の体の中に戻ってきた。

花林はひとりで輪の中心に立っていた。すべての音はやみ、誰かれなく花林に握手やハグを求めてきた。「風の旅人」が花林の前に来た時、

「いやあ、すごい踊りだったよ。これぞ、縄文ダンスだ」

そういうと花林の手を強く握りしめた。

縄文？ 飛鳥は古墳時代ではなかったか？ そんなことを思っていると舜が前に立っていた。

「ほんとすごかったですよ」と両手を取って持ち上げられた。

「自分じゃなにも……」

確かに記憶のある部分もあるにはあるが、ではあの蟹や亀や赤とんぼは何だったのか。

『『まれびと』の面目躍如ね。わたしたちは古代の祭祀を再現してるから、偶然の客はわたしたちに何かを伝えるに来ているって、どこかで信じているところがあるのよ』

すずさんは皆に語りかけるように言った。

「じゃ時刻も二時なので、そろそろ帰りましょう」

すずさんはそう言うと言真中にあつた仕掛け道具をろうそくごと持ち上げて先頭を歩いた。ここに来た時間は九時か十時だったはずで、四〇五時間も時間が過ぎていたことに驚愕した。第一、再現された祭祀をまったく観た実感がないではないかと思った。一同はサロンに雪崩れ込むように入っていく、そのまま横になる者もいた。

エンジ色のロングシートに腰かけているのは花林ひとりだった。同じ車両に人はまばらで、この席から車掌の姿がガラス越しに見える。車窓の景色は逆回転の映像のように順番を異にした既視感を花林に与えた。ほんとに予想外の一日だった。丁度この位置から女性の運転士とガラスにへばりついている男の子を見ていた時から二十四時間しか経っていないのが信じられなかった。数奇な体験をするということは時間を何倍も要するもの。浦島太郎の玉手箱の中身は先取りしてしまった時間が入っていたのではないだろうか、疲労困憊した自分の今とを重ね合わせて思った。

電車は阿部野橋終点に着き、花林は電車を降りた。改札を抜け地下街に入るとあまりの人の多さに足が止まる。連れ立って歩いている人以外はこんなに人間がいるのに知らぬ顔ですれ違い、追いつき追いつき越されていく。どんと後ろから人が当たってきた。その人はこんなところで止まってるんじゃないかといったげな顔で花林を睨んだ。その瞬間、ポンと

太鼓の音がなったような気がした。花林に当たって行った人が今度はキャリーバックの人に当たって反対によるめいている姿が目に入った。口元が緩むのをごまかすように鞆を持ち替えて流れの中に入っていた。

その後も阪堺電車の発車のベルや車内に付いている停車ボタンの音に花林は反応しつづけた。電車が母の墓のある霊園を通り過ぎる時、また太鼓の音が鳴った。交差点の一角に赤い文字で書かれたプラカードを持った人たちのところに大きな太鼓が置いてある。その前に垂れ幕がかかっていて読もうとしたが、電車は青信号で動き出してしまった。

家の前にきて門の鍵を開けていると、黒猫が足にすり寄ってきた。門を開くと花林より先の中に入って行き、玄関の前で座っている。玄関の戸を開けてやると一目散にリビングに走っていった。後を追うようにリビングに行くと、黒猫は掃き出し窓の傍で横になり、体を捻じるように回転させている。花林は我が家のようにくつろいでいる黒猫を見おろしながら叔母に電話をかけた。十回コールしても出なかつたので電話を切った。

切ってから思ったのだが、花林は父と会って話したり思ったりしたこと、記憶がすっかり薄らいでいるのだ。それよりも太鼓の音に体が勝手に動きだしたことや夢か現実かわからない幻影を観たことの興奮がいまだに覚めないでいる。それに加え、すすさんが言った、なぜ自分たちが祭祀の復元をしているかの理由がへいまでも残る自然界への儀式は人間と自然が元来は繋がっていた名残り～ではないだろうかと考えていてへ人間も太古の昔は言葉を介さず通信できたがやがて通信は途絶えたが儀式だけ残っている。再び通信ができる 때가くるときのため、祭祀を継承し続ける必要があるし、その時期はもうそこまできているのかも知れないと語ったことが頭から離れないでいる。

古代において人間が自然界と同じサークルのなかに居たのだとしたら、生きるという営みも個人の意思の及ばぬ領域のものであったのではないかと花林は思った。そうだとしたら人間の中だけで生きていた自分は井の中の蛙であり、そこでの苦しみや悩みもなんとなく無意味に思えるのだった。

花林はまた黒猫に視線を落とす。父と母との家族関係として、この黒猫と同等のものだったのかも知れない。親子の関係も夫婦の関係も自然のサークルの中では大きな流れの一部なのだと思った。

手の中でスマホが震えた。画面に叔母の名前が出ている。画面をタッチしスピーカーに切り替えた。叔母の声がリビングに響くと黒猫が驚いて体勢を変えた。電話したのは昨日父親に会ってきたことを伝えるためだったと言ったら、叔母の声は一段と大きくなり黒猫

はダイニングテーブルの下に隠れてしまった。叔母は話を聞きたいから今夜家においでと誘ってきたが、花林の頭の中はいろんな事がありすぎて、まずはひとりで落ち着いて考えたかった。それで、こつちもキッチンに片付いたから自分が食事を作って叔母を招待したい、ついでには、メニューを決めたりする時間が欲しいので明日にしてくれないかと頼んだ。叔母はじゃあ楽しみにしているわと言って電話を切った。

叔母に父と会ったことを伝えたら、ほっとして急に力が抜けた。とりあえず横になろうと思い、自分の部屋に行くため階段を上りかけた。すると、黒猫が後ろから追ってきて階段途中で花林を抜かして行った。これまで黒猫が二階に上がることがなかったのでどうしたのだろうと思ったが、部屋のドアを開けると黒猫も一緒に縛れるように入ってきたので好きなようにさせておいた。

ベッドサイドの置き時計を見ると午後三時を過ぎたところだった。花林の部屋は角部屋なので二方に窓があり部屋の中は午後の光をいっぱいに取り入れている。黒猫は部屋を歩き回り、止まるとその匂いを嗅いでいた。花林は服を着たままベッドに倒れ込んだ。そのあとを被さるように睡魔が体に浸透していく。目を閉じているが黒猫がベッドに上がったのが分かった。花林の髪の毛の匂いを嗅いでいる。柔らかい肉球がうつ伏せに寝た花林の肩に乗せられていた。ピンポイントで押される気持ちよさを感じながら意識が混濁していくのを止められなかった。

黒猫が花林の耳に鼻を近づけているのか、ゴロゴロと喉を鳴らす音と呼吸する音がして目を開いた。部屋の中はすっかり暗くなっていた。黒猫はそばに居なくて、うつすらとした影がドアのところにあった。そろそろ外に出る時間なのだと思い、体を起こして立ち上がった。外から鐘や太鼓の音がする。もう七時なのだとかかいの夜のお勤めが始まっていることで時間が分かった。

ドン――

いつもと違う太鼓の音が部屋に響き渡る。

ドン――

ドアノブだと思っ握っていたのは石の棒のようなものだった。

ドン――

上を見上げるとなんと夜空が見える。

ドン――

黒猫が後ろ脚で立ち上がり飛び跳ねている。

これは踊れということなのだと思う。空には大きな満月と明るい星がくっつくように並んでいる。花林は踊りながら、さすがに言っていた通信のことを考えた。言葉にすることは無理だがこうして踊っていると、何かを受け取っているのは分かる。これはきつと英語がまったく聞き取れない人が聴きつづけるうちにだんだんと言っていることが分かるようになる類のものだと思う。いまは何も分からなくても踊り続けていれば、いずれ分かるのだ。

暗闇の中で目が覚めた。黒猫は花林の右脇腹のところで眠っている。置時計を見ると三時過ぎだった。ではさっきのは夢？ 花林は少しがっかりした。自然界との通信の糸口をみつけたと思っていたのはなかったことなのだ。ベッドの上でござそ動いていると黒猫も動いた。横になったまま体をまっすぐ伸ばす。こんどは前足を顔の前で交差し背中を丸め、ぐつと自分を抱きしめるように力を込めた。ベッドからすとんと降りると花林の方を振り向いた。外にでたいのだろうと花林もベッドを降りた。

廊下の電気をつける。花林の向かいの部屋が父親の部屋でその隣が母親の部屋なのだが、ここに戻ってきたときに一度覗いただけでそれ以来どちらの部屋にも入っていなかった。今、花林は父親の部屋のドアノブを握っていた。ドアを開くと湿った空気が鼻孔を刺激した。昨日訪ねた父親の部屋が見えた。ドアを静かに閉じた。次に母親の部屋のドアノブを掴む。黒猫が花林の足の間に挟まるように寄ってきた。そうだよ。花林は黒猫に言った。ここに母親はいるのだ。

ドアを開ける。先に黒猫が入っていく。花林も気合を入れて部屋に入った。電気のスイッチを押した。ピンピンと小さい音がして天井から吊り下げている照明が点いた。部屋はハンガーラック二台に嫁入りのときに持ってきた洋服ダンスや整理ダンス、和ダンス、鏡台でスペースはほぼ埋まっていた。一番場所を取っているベッドは病気になってから買入れたに違いないと思った。そういえば、母親の部屋から物干し台に出るのだがいまはベッドの上を通らなければ出られない。ここに戻ってからは庭で洗濯物を干して、二階の物干し台の存在自体忘れていた。

黒猫がベッドに上がって、前足を上下に動かしている。そこは微かにくぼんでいて、さらによく見ると人がたになっっていることが分かる。

花林ははっと思った。なぜ自分が家に帰らなければならないと思っていたのか。家を捨てたにも関わらず孤独にも関わらず。それは「家族」という群に常に規制されていたから

と思う。離れば離れるほど、逃げれば逃げるほど目には見えない糸は太くなりここに引き戻される。

黒猫が鳴いた。

それは違うとでもいうような、長く延びた強い鳴き方だった。

〈そうだね、ごめんね〉花林は黒猫の横に座って頭を撫でてやった。その時、窓ガラス越しに黒い物が動いているのが見えた。ベッドの上で黒猫と花林は向きを変えた。黒い物は左右に動き、時折、窓ガラスを何かで突いた。

体を伸ばして、サッシの鍵を外して窓を少しだけ開いた。まず黒猫が進み出て、隙間に顔を差し込んだ。瞬間、後ろに飛びのいた。花林は窓枠に手をかけて、さらに大きく開いた。現れたのは黒い鳥だった。嘴も足も黒くてガラスに違いないと思ったのだが、サイズが街中で見かけるガラスに比べて小さかった。黒猫が一生懸命に子カラスの臭いを嗅いでいる。すると子カラスはリズムを取るように右へ左へ体重を移動し、次に体を上に延ばしたかと思うと、こちらのベッドの上に降りてきた。

それからしばらく、花林と黒猫と子カラスはベッドの上でじっと蹲っていた。最初に動いたのは花林でトイレを我慢しきれず、二匹をそのままに階下に降りていった。トイレから出ると黒猫がリビングの窓の傍で外に出せとばかりに待っていた。すぐさま開けてやり庭に降りていく姿を見送った。また二階に戻り、母親の部屋に入ると子カラスの姿はなかった。物干し台を見てもいなかった。外は白みはじめていた。

辺りから生活音が聞こえだすのを待って、花林は一階の掃除を始めた。掃き出し窓を全開にし、キッチンも出窓も風呂場横の勝手口、玄関のドアも開けられるところは全部開けた。床の掃除を終えるとモップで水拭きをした。風呂場とトイレの掃除をし、最後に玄関先を箒で掃いた。次に下駄箱の上や棚の上を雑巾で拭き、階段も同じく雑巾で拭き上げた。天気が良かったのでリビングにかかっているレースのカーテンも洗った。

ダイニングテーブルの上にあったものを全部退かして、引っ越しの段ボールからオレンジが基調のテーブルクロスを敷いた。これは東京に住んでいたときデパートの催事場で実演していたブロックプリントというインドの伝統工芸を観て買ったものだ。手彫りの木版を使って布にインクを押し付けて作る。カラフルで複雑な柄になると幾重にもインクを重ねていくため、作業工程は果てしない。ズレや歪みも手作りならではのものだ。花林にとっては高い買い物だったため、大事にするあまり今まで使うことなく仕舞込んでいたのだ。

同じ段ボールから香木も出てきた。それを焚べるのに何かないかと食器棚を探してみる。と下段の開き戸の中に木箱入りの器がでてきた。志野焼・志野草文四方向付と箱書きされ、中をみると十五センチ角の丁度いい感じの皿が見つかった。香木に火をつけて皿を下駄箱の上に置いた。

次は献立だった。花林はダイニングテーブルの椅子に腰かけて、一昨日の飛鳥のゲストハウスで食べた物を思い出そうとした。が、出てくるのは舜と交わした会話や舜の表情ばかりで肝心の料理の画が出てこない。しかし二十人以上いたと思われる人数の夕飯をひとりで作った舜のすごさに改めて感心するばかりだった。

仕方がないので花林が作ってきた料理だけで献立を考えようと目を閉じた。まず浮かぶのは春雨ポテトサラダだ。メインは鶏しぎ焼にしよう。これを作るときは余ったタレでピーマンの炒め煮を作るのでそれも作る。もう一品は色彩も考えてトマト玉子炒めが浮かんだ。まるでお弁当のおかずみたいだなと花林はひとり笑った。

叔母と約束している五時から逆算してスーパーに買い物にでた。そこで瓶に入ったジュンサイをみて、舜が食べていたジュンサイのお茶漬けを出すことにした。花林も実際の味は知らなかったがスーパーの中でネット検索してみると出汁茶漬けがでてきた。花林はこれを見ていなかったらお茶をかけていたところだったと思った。

キッチンコンロにはフライパンや鍋が洗いあげられ並んでいる。時間は四時半を過ぎたところだ。ジュンサイ茶漬け用の出汁を昆布とカツオで取り薄口しようゆとみりんで味付けし終わったところで料理は整った。朝の志野焼の器にせよ、こじやれた器は箱にはいつのまま一度も使った様子はなかったが、花林はそれらを次々引っ張り出して料理を盛りつけた。ピーという音がしてご飯が炊き上がった。これで叔母がいつ来ても大丈夫だと椅子に腰かけた。それにしても、花林は思った。人のために料理を作ることがこんなに楽しいものだとは思ってもみなかった。それゆえ、作ってくれた人の気持ちなど考えたこともなかったのだ。

チャイムが鳴った。するとソファで寝ていた黒猫が玄関に走っていった。黒猫は花林がスーパーで買い物を終えて帰ってくると門の屋根から飛び降りて、鍵を開けると先に家に入っていた。餌も食べずトイレもしないで半日以上この家にいるこの黒猫を花林はなんと思えばいいのか分からなかった。黒猫は玄関マットの上に座っていた。花林は三和土に降りて玄関ドアの鍵をあける。ドアの向こうに紙袋をいくつも下げた叔母が立っていた。一歩中に入ると黒猫に気づいたようで、

「あら、猫ちゃんいたの」と黒猫に声をかけた。

黒猫は叔母の足に自分の体を擦りつけて、仕舞には床に寝転がってしまった。叔母は黒猫を踏みつけないようにと足を高くあげ膝を曲げガニ股で廊下を進んで行った。玄関マツトで置いてきぼりをくらった黒猫は猛ダッシュで後を追う。花林は一連の黒猫の動きを見ながら、急に人懐こくなくなっていないかと首を傾げた。

花林がキッチンに行くと叔母がシンクのところで自分が持ってきた紙袋から中身を取り出しているところだった。

「いっぱい料理作ってくれたね。わたしはこれ作ってきたよ」

そう言ってタッパーウェアの蓋を取って中を見せた。そこには大きな肉の塊がタコ糸で括られて茶色い煮汁に浸かっていた。

「これは豚角煮？」

花林が鼻を近づけて匂いを嗅ぎながら訊いた。

「何になるかな。角煮は分厚く切ってから煮るけどチャーシューはタレに付け込んだブロックを焼くのね。これはブロック肉を焼いてから煮たし、ウーシャンフェンもたっぷり使ったから角煮でいいか」

叔母が角煮を切っているあいだに花林は盛りつけた料理をテーブルに並べた。

「あ、これ知ってる。義姉さんが作ってたね」

叔母が春雨ポテトサラダを食べながら言った。

「そうそう、この味。でも玉ねぎはもつと辛かったかな。これ水で晒したでしょう」

叔母に言われて、花林がいつもちよつと違うと思っていた理由がやっと分かった。

「うん晒してる。お母さんは晒してなかったんだ」

花林も春雨ポテトサラダを頬張った。

鶏しぎ焼も玉子とトマト炒めも美味しい美味しいと言って叔母は食べてくれた。花林も叔母の持ってきた角煮を食べてとろける柔らかさに感動した。

「締めのご飯を用意してるんだけど、まだ入る？」

花林は自分がいっぱい分満腹になっていたので訊いた。

「なんの、まだ入るよ」とお腹をさすってみせた。

そこで出汁を温め、小さめの丼に半膳のご飯をよそい上にたっぷりジュンサイを載せた。真ん中にチューブの本わさびを絞って置き、ジュンサイが浸るまで出汁を注いだ。

「ええ、なにこれ、ジュンサイだよね」

叔母が丼を手を持って言った。箸の先でわさびを軽く溶かし、ずずっと一口啜った。「美味しい」丼から顔を上げた叔母が言った。

食事の最中はどちらとも父親の話題は持ち出さなかったが、叔母が持ってきたチーズケーキでコーヒーを飲んでいるときに叔母が切り出した。

「兄さんはどうだった？」

聞かれて当然のだが花林はと言うべきなのか迷った。生きていくのが面倒だと言っ  
てはいたが、畑で野菜を作り自分の城を持ち、健康そうだった。

「元気だったよ。畑で野菜作りをした」

叔母は片方の眉を少しあげ、

「誰かと住んでるの？」と訊いた。

「さあ、部屋の中はちゃんと掃除が行き届いてるし、洗面所に女物の日用品がちらほらあ  
ったけど」と言いながら、何という勘のよさと思った。

「なるほど。花林はどう思った？」

それに対する答えは、

「どうこう言う資格はないよ。叔母さんに母親の最後を任せきって逃げていたわたしに。  
そういう意味ではわたしとお父さんは同じなもの」

「花林に前から話さなきゃって思ってたんだけど、花林はわたしに負い目を持たなくてい  
いのよ。そりゃ兄さんが蒸発したときは精神不安定で病院に連れて行ったけど、そんなの  
一時のことだったし。それより義姉さんにはこの家で起こったあることで、物凄い変化が  
あったのよ」

おどけたように目を見開いて花林を見た。

「何？ 教えてよ」急かすように早口で言った。

「一見、お菓で落ち着いたように見えたけど、今度はどんと落ち込んでしまったわけ。一  
日中布団から起き上がれなくなった。それでね、どうせ寝るんだったらお布団よりベッド  
にしたらとか言っつて、義姉さんを外に連れ出そうとしたの。まあそれには同意してくれて  
ベッドを買ったわけ」

あのベッドは病気のときではなく、そういう理由で買ったのかと頷いた。

「あれ、物干し台に上がる窓の所にくっつけて置いてあるでしょう」

再び、うんと頷く。

「そこで寝だしたら明け方に窓を突く何かがいたんだって」

叔母は花林にそれが何か言ってみろというジェスチャーをしてみせた。

「カラスでしょ？」

花林が答えると叔母は崩れるように肩を落として、

「なんで分かったの？」と訊いた。

「今朝、お母さんの部屋に入ったとき同じことがあったから」

叔母はしばらく考えに耽っていたようみえた。それから顔をあげ、

「わたしが話すまえに花林がカラスに出会ってるなんて、人知を超えた何かの成せる業としかいいようがないね……。でも何年も前だから同じカラスじゃないと思うんだけども」

「うん、わたしが見たのは子どものカラスだったよ」

叔母は二度三度頷くと、

「義姉さんは窓を突くカラスに驚くんだけど、カラスはしれつと部屋の中に入ってきただって。それから毎日ほとんどの時間を一緒に過ごしてくれた。そうすると義姉さんの精神もすっかり落ち着いて、生活も元通りになったの。家にいるときも買い物に行くときもどこからか義姉さんを見守っているの、ご近所でカラスおばさんってあだ名をつけられていたくらい。それからわたしとの劇団にも興味もってくれたりして、ほんとに仲良くなれたのよ。癌になったときも、もっとちゃんと今の状況を説明すれば花林は帰ってくるって言っても、義姉さんは花林が帰ろうと思うまでそっとしておいてくれて言うのよ」

叔母はそう言い終えると、コーヒークップを持ち上げゆっくりと飲み干した。

夜も更けて花林は寝支度をするため二階に向かった。今夜も黒猫はいる。

母親の部屋のベッドの周りを整理して、自分の部屋からシーツや掛布団、枕を持ち込んで母親のベッドにセットし横になる。興奮しているのか浅い眠りを何回か繰り返していた。

コツコツと窓ガラスを突く音がした。

花林は急いで起き上がったが子カラスを驚かさないように、ゆっくりと窓を開ける。そこには昨日と同じ子カラスがいた。体を右へ左へ重心を移し上に延びたかと思つた瞬間、ベッドに飛び込んできた。掛布団を二つ折りにたたみ、スペースを広げてやった。花林はベッドから降りて床に正座する形でベッドにもたれかかる。黒猫は子カラスの向かいに背を低く蹲りベッドの上でも左右に重心を移す動きを続けている子カラスを目で追うように左右に揺れていた。花林は木製のベッドの縁を手の平で軽く叩いてみた。右手で二回、左

